



News Letter

No. 85

The Iida City Institute of Historical Research

2016年12月1日 発行

飯田市歴史研究所

〒395-0002

長野県飯田市上郷飯沼3145

TEL 0265-53-4670

FAX 0265-21-1173

E-mail iihr@city.iida.nagano.jp



<寄託史料の紹介>

松下家文書の整理と調査—伊那谷の富士信仰と松下千代

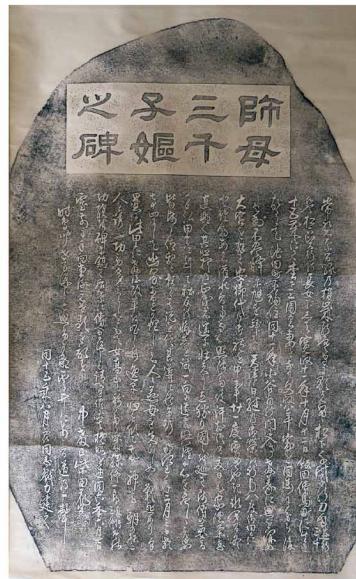
梅澤(宮崎) ふみ子 (恵泉女学園大学名誉教授)

富士山は万葉の時代から崇拝されてきましたが、信州で富士信仰が盛んになるのは江戸時代後期の文政期以降です。飯田伝馬町の商家の若いお内儀さんだった松下千代（1799–1872）が、浜松近郊と飯田を行き来する商人から「不二道（ふじどう）」という教えを聞いたことが、きっかけになりました。千代や同志たちの布教で不二道は伊那全域から松本や上田方面にも広まり、飯田藩士の家にも信者ができました。千代の子孫である松下祐輔氏に伝わった「松下家文書」は飯田市歴史研究所へ寄託され、目録作成と調査が進んでいます。

不二道は関東で流行した富士講から分かれた信者集団で、その教えの要点は人々が家業に精を出し、正直・慈悲・謙虚などを実践し、互いに助け合えば、理想の世になるというものでした。信者たちは水害の被災地に種糓を送ったり、労働奉仕で用水や堤防の建設や修理などを行ったりしました。不二道の教えには、男女の間に優劣の差はないとして女性の活躍を促すという特色もありました。江戸時代の宗教には珍しく、女性の千代が信州の信者のリーダーとして活躍できたのもそのためでしょう。不二道は嘉永2（1849）年に徳川幕府から禁止されて目立つ活動をしばらく控えましたが、幕末から明治初期に信者を増やし、明治10年代に実行教へと発展しました。伊那谷における不二道から実行教への発展や千代の活躍は、市村成人著『伊那尊王思想史』にも描かれています。

「松下家文書」は、資料保存用の段ボール箱に換算して40～45箱分にのぼります。その大部分は、礼拝などに用いた掛軸・教義書の写本・信者間で交わされた書状・奉仕活動の記録など信仰に関する史料で、飯田藩が信者を褒賞した文書もあります。千代の家は醤油を商い、近代には交通関係の事業にも進出したので、その関係の史料も若干ありますが、経営関係の史料の大部分は未発見です。「松下家文書」の一部は1994年に埼玉県立文書館へ寄託され、それ以外は名古屋市の松下氏宅に保管されていましたが、これらを一括して2015年10月に松下祐輔氏より飯田市歴史研究所へ寄託されました。研究所では寄託を前提に予備調査を行い、寄託後ただちに目録作成に取りかかりました。現在では目録原稿がほぼ完成し、入力作業が進んでいます。

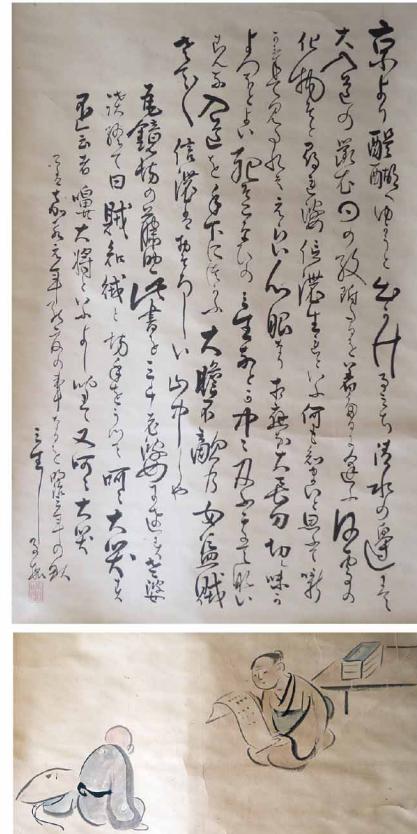
伊那谷には、飯田市歴史研究所がさきに調査した松川町の部奈家や、飯田市美術博物館が調査した氏乘木下家のよう、富士信仰関連の文書や記録が伝わる旧家が少なくありません。経営の面で松下家と関わった旧家の史料もあるはずです。「松下家文書」をそれらの史料と合わせて活用すれば、江戸時代後半から近代にかけての伊那谷の社会・文化・宗教について、より深く理解する手がかりが得られるだろうと期待されます。



明治15(1882)年に伊那谷の同志が建立した松下千代(行名は三千)の顕彰碑の拓本。碑の上部には、「師母三千子姫之碑」と彫られている。現在も飯田市上郷黒田の野底川の橋を渡った先の旧道沿いにある。



信州における不二道の信仰の起源を記した千代の草稿。商売を兼ねて浜松近郊から飯田を訪れた信者によって伝えられたことが記されている。用紙周辺部が焼けているが、火災にあって危うく焼失を免れた文書かもしれない。



松下家文書に含まれる軸物(部分)。画賛は後に実行教管長となった柴田花守筆。絵には花守からの書状を読み信者と談笑する千代が描かれ、文は「呵々大笑」と「嬌大將」の語呂合わせをまじえ千代の活躍を称えている。

史料紹介

—飯田藩の操練関係史料—

飯田藩は嘉永3(1850)年の3月に、押洞(上飯田)で軍事操練(訓練)を行いました。これはペリーが来航する3年ほど前のことです。今回ご紹介する史料は、福沢洋治氏旧蔵文書(歴史研究所蔵)の中にある操練に関係する絵図2点です。

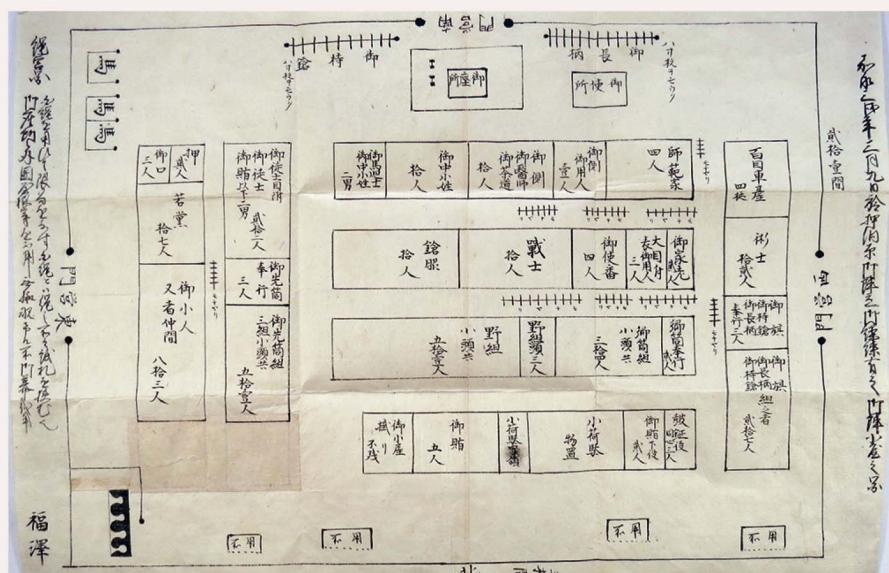
1点目は①「押洞操練陣立図」(図上)です。この絵図には中央に「御陣小屋」と書かれた部分があり、その周りにも「御側御用入」や「御徒士」などの記載があつて、多くの藩士たちが集められていたことがわかります。また押洞川沿いには、非番の藩士たちに加え、「村夫人足寄場」という記載があり、近隣の百姓たちもこの操練に動員されていました。

続いて2点目は②「押洞操練御陣小屋縄営図」(図下)です。これは1点目の絵図で「御陣小屋」と書かれた部分の内部を描いたものです。藩主の居所(「御座所」)のほか、「戦士」などの記載があります。この操練の参加者は、少なくとも498人になりました。当時は外国船が日本近海に接近し、百姓らによる一揆や騒動が多く起った時代もあり、飯田藩としても、こうした状況に対応しようとしたのでしょうか。この2点の史料により、飯田藩が行った操練の様子がよくわかります。

(研究員 千葉 拓真)



①「押洞操練陣立図」



②「押洞操練御陣小屋縄営図」

飯田市歴史研究所第4期中期計画策定について

現在、平成29年度から平成40年度までを期間とする第2次飯田市教育振興基本計画の策定が進められていますが、教育分野の個別計画もそのスタートに合わせるため、飯田市歴史研究所第3期中期計画(平成25~29年度)の終期を1年前倒しして、今年度中に第4期中期計画を策定していくことになりました。

第3期実績の自己点検・内部評価や有識者による外部評価、教育委員会や歴史研究所協議会での協議を行い、平成29年度の歴史研究所移転の予定や、第3期から引き継ぐ課題などを踏まえ、平成29年度から4年間を期間とする計画の策定作業を進めているところです。

この中期計画(案)について、今後パブリックコメントを実施していくので、ご意見をお寄せいただければと思います。(パブコメの実施期間は飯田市ウェブサイト等でお知らせします。)

飯田市歴史研究所の移転について

現在、飯田市歴史研究所がある上郷自治振興センターは、上郷公民館・自治振興センターの耐震化に伴う建替工事を行うことから、歴史研究所は平成29年秋に移転をすることになります。

「地域振興の知の拠点」の構想に基づく検討も並行して進められる中、今回の移転は一時的(暫定的)なものとして検討を行っています。



田嶋 一 (歴史研究所顧問研究員・國學院大學教授)

ネパール地震(2015年4月25日)の半年ほど前のこと、教育関係者とともに首都カトマンズから車で3時間ほど山道を走り、ティストン村の小学校を訪れた。急峻な山の斜面に建てられた学校の前で、子どもたちは真っ赤な花のレイを用意して待っていてくれた。

ネパールの小学校は5年制。この学校は1学年1クラス全5クラスの小さな学校で、子どもたちは山道を片道1時間以上もかけて歩いてやってくる。5年生の教室で「学校は好きですか」と質問してみた。みんなの手が一斉にあがった。子どもたちは学校で学ぶこと、友達と会うことが大好きなのだ。でも、ネパールにはまだ義務教育制度はない。就学できずに都会に働きに出る子どもたちも少なくない。小学校の教科は英語、ネパール語、算数、理科だけで、ネパール語の時間を除き授業はすべて英語で行われている。郡の教育事務所でその理由を尋ねたところ、大人になると外国に働きに出ることが多いので、という答えが返ってきた。子どもたちはこんなかたちでグローバリズムの波に巻き込まれている。

この学校では数年前からようやく学校給食が始まった。給食は小麦粉を水で溶いてバターを加え煮詰めたものひと椀だけ。栄養不足で青ばなを垂らしている子が何人もいるのを見て、団塊の世代の私は自分たちの子ども時代を思い出した。そこで、せめてひと月に一回、給食にゆで卵をつけることができたらいいね、ということになり、私たちは基金を募って「たまごプロジェクト」を立ち上げた。村で鶏を飼って卵を学校が買い上げるような仕組みができたら一石二鳥だね、などと夢がふくらんだ。プロジェクトは現地の協力者も得て、すぐに動き始めた。ゆで卵の出る日はジャパンディとよばれることになった。おばあちゃんに食べさせたいからといってゆで卵を食べようとしない子がいた、という報告を受けたときには、胸が熱くなった。その後大地震で学校も被災し、基金をテントなどの救援物資資金として一時流用したが、復興が進み、うれしいことにジャパンディはいまでは月二回になっている。



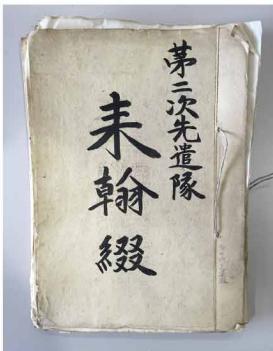
平成28年度文化庁文化芸術振興費補助金（文化遺産を活かした地域活性化事業）

旧川路村役場文書の整理作業を進めています

川路自治振興センターの敷地内にある蔵には、旧川路村役場文書を中心として、かつて川路で暮らした人びとの様子を示す貴重な歴史資料がたくさん保管されています。歴史研究所では、この9月から、まちづくり委員会などの許可を得て、文化庁の「文化遺産を活かした地域活性化事業」の一環として整理作業に取り組んでいます。

新しく発見された興味深い文書をひとつ紹介しましょう。戦時中、国策に従い、川路村からは多くの人が満州(浜江省木蘭県老石房川路分村)に渡りました。いわゆる満州移民です。本格的な移住に先立って先遣隊が派遣されましたが、今回の作業の中で、昭和14(1939)年1月に出発した第2次先遣隊から川路村へ差し出された書簡の綴りが見つかりました(「第二先遣隊来翰綴」)。このうち同年5月の

書簡では、移民自ら耕作する田が5町、畠が60町ほどあり、一方で満州人や朝鮮人へ小作に出す田が200町、畠70町ほどあること、また農耕作業には苦力(労働者)30人と馬20頭を使い、大豆・高粱・粟・ポウミー・小麦・稻を作付け、蒔きかけていることなどが記されています。また7月の書簡では、赤痢が発生し、女性1人が亡くなったことなどが述べられています。満州移民の生活実態の一端が知られる貴重な文書といえます。



昭和14(1939)年
「第二次先遣隊来翰綴」



史料を保存している川路自治振興センターの蔵



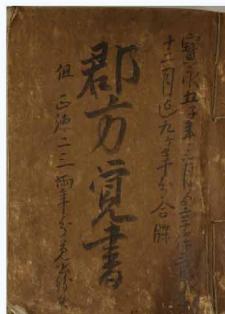
(研究員 羽田 真也)

整理後の蔵 1階の様子

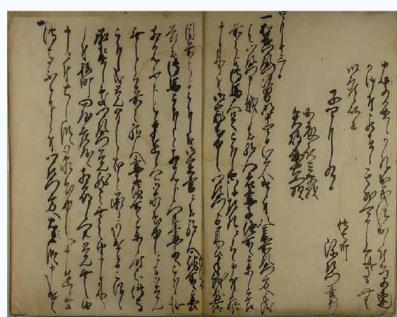
歴研ゼミナール活動報告 —近世史ゼミ「郡方覚書」をよむ—

歴史研究所では、各種のゼミナールを開講しておりますが、その中で近世史(主に江戸時代)をテーマにしたゼミを開講しております。近世史ゼミで去年から取り組んでいるのが、「郡方覚書」という史料の翻刻と読解です。この史料は、江戸時代の中ごろ(18世紀前半)のもので、飯田藩が町方や村方を支配するために設置した役所である「郡方」で作成された記録です。飯田の町や村々でおこった様々な出来事について記されています。現在までに宝永5(1708)年分と宝永6(1709)年の前半部分を読みました。ゼミの内容は史料を活字におこし、内容を読み解くというシンプルなものですが、飯田の歴史を紐解くうえで基礎となる重要な作業です。こうした作業を通じて、参加者の方々と江戸時代の飯田・下伊那について理解を深めていきたいと考えています。

(研究員 千葉 拓真)



郡方覚書(表紙)



郡方覚書(宝永5(1708)年4月13日条)

歴研ゼミ&ワークショップ 12月・1月の予定

受講生募集!!

スタッフとともに歴史を学んでみませんか。

場所:歴史研究所 研修室

近世史ゼミ 担当:千葉 拓真(研究員)

12月6日・20日 / 1月10日・17日 (第1・第3火曜日) 19:00~20:40

近現代史ゼミ 担当:田中 雅孝(調査研究員)

12月10日 / 1月14日 (第2土曜日) 10:00~11:40

わが町の建築史ゼミ 担当:樋口 貴彦(研究員)

12月9日 場所:旧飯田測候所 / 1月19日 (第3木曜日) 18:30~20:00

満洲移民研究ゼミ 担当:本島 和人(調査研究員)

第65回 12月3日 / 第66回 1月7日 (第1土曜日) 10:00~11:40

思想史ワークショップ 市民の皆さんがあなたと一緒に学ぶ場

12月7日・21日 / 1月4日・18日 (第1・第3水曜日) 19:00~20:40

ゼミ・ワークショップの詳細・お申込みについては、歴史研究所までお問い合わせください。TEL: 0265-53-4670

開所時間:午前9時~午後5時

休所日:日曜日・月曜日・祝日・12月29日~1月3日

地域史講座

山村の木材利用と景観

遠山谷に景観として見られる木材利用の特徴について、遠山谷と類似するその他の山村の状況もふまえつつ、建築物、屋敷まわり仮設物、耕地等の土木工作物、そして薪の利用も含めて検討します。

開催日: 12月24日 土

時 間: 14:00~15:45

進行役: 樋口 貴彦 (研究員)

ゲスト: 青柳 由佳 (名古屋女子大学講師)

安田 徹也 (竹中大工道具館研究員)

会 場: 南信濃地域交流センター会議室
(飯田市南信濃和田2596-3)

※参加費や事前の申し込みは必要ありません。どなたでもご参加いただけますので、お気軽にお越しください。

飯田・上飯田の歴史シリーズ第3回

地域史講座

江戸時代後期飯田町の町政運営

江戸時代の飯田町運営に関わっていた町人の中で、実務を担当していたのは組頭と呼ばれる人びとでした。彼らが実務記録として残した「十三町組頭日記」をもとに、江戸時代後期における飯田町政のしくみと運営の実態について考えます。

開催日: 1月21日 土

時 間: 14:00~15:30

講 師: 竹ノ内 雅人 (調査研究員・東京大学助教)

会 場: 飯田市役所 C棟3階会議室
(飯田市大久保町2534)

※参加費や事前の申し込みは必要ありません。どなたでもご参加いただけますので、お気軽にお越しください。

定例研究会

「上郷の対空監視哨について」

開催日: 1月28日 土

報告者: 原 英章 (調査研究員)

: 中島 正韶 (上郷史学会)

時 間: 14:00~16:00

場 所: 飯田市歴史研究所 研修室

※定例研究会はすべて公開で行っています。どなたでもご参加いただけます。